「アーカイブ」維持が重要

アンドルー・ゴードン米ハーバード大教授

米ハーバード大歴史学部のアンドルー・ゴードン教授(73)は、東日本大震災など災害の記録を集めた「アーカイブ」事業に長年取り組んでいる。今回の世界防災フォーラムでは、教育に使える地理情報ツールを紹介。継続が困難になるサイトがあるなど、近年の課題も指摘した。

ゴードン教授は、本県と連携する同大ライシャワー日本研究所「日本災害デジタルアーカイブ」を主導する。今回はスマートフォンの地図画面で詳細な情報を見られる機能について発表。被災した現地で情報を得られ、ツアーや防災教育に役立つとした。

アンドルー・ゴードン教授

岩手日報社ブースでは、東京大大学院の渡辺英徳教授と共同制作したデジタルアーカイブを視察。「教訓を伝えることが大事で、いろんなアーカイブの維持、継続が重要。次の大災害時に、いつでもプロジェクトを立ち上げる資金と心の準備も大切だ」と説いた。

時間が経過し、閉鎖されたサイトもある現状に「日本に限らず、アーカイブは約10年で保守やコストの問題が出てくる。長期的な維持にはエネルギーが必要」と課題意識を示した。地方紙が連携し、災害情報に限って公開する社会貢献のアイデアも披露した。